



我々は何処からきて、何処へ行くのか？

私は一人のアストロバイオロジスト(宇宙生命学者)として、常に、宇宙から地球を観る感覚で、近代原子論を基盤にもの事を考えるようにしている。地球上に生命が現れたのは、今からおおよそ38億年前で、生命は様々な環境変化に適応しながら進化を遂げ、多様性に富んだ生命世界を築いてきた。この生物進化の過程で、人類はおおよそ650万年前に誕生し、数々の試練を経ておよそ20万年前に現在の人類ホモ・サピエンスが誕生した。人類は、巧みな生活技術を駆使して地球全域に生息域を拡げ、記録技術を発明し、文明を創出し、科学技術を取り入れて生活の質を向上させ、今や生活の場を宇宙にまで拡大しようとしている。一見、文明は順調に進化しているように見えるが、近代原子論に基づいて考察すると、現代の文明社会は、38億年の生命史上最も深刻な危機に直面していると考えられる。このことは、既に今年の本紙2月1日号と3月1日号で、また、他の雑誌やラジオでも「地球環境核戦争」の概念として取り上げて頂き、微力ながら社会に対して警鐘を鳴らすことができた。この度、本紙に毎月1回のペー



地球儀を見上げる筆者(左奥)

スで「地球環境核戦争」にまつわるコラムを書かせて頂くことになった。

近年、数多くの優れた文明史を扱った書籍が出版されている。例えば、『ピククヒストリー(テビッド・クリスチャン他著)』、『文明崩壊(ジャレット・ダイヤモンド著)』、『サピエンス全史(ユヴァル・ノア・ハラリ著)』などである。これらは、いずれも綿密な調査、卓越した研究技法、重厚な考察の基に、現代文明の問題点を明らかにし、人類の進む方向に対して力強い指針を提供している。しかし、これらの書籍の内容を、近代原子論に基づいて考察すると、いずれも基本的には、原子核の周辺の電子雲の変化について論述しているだけで、地球環境核汚染を考察する基本的な視点は完全に欠落している。私は、現代文明の最大の危機は、人類が、原子のもう一つの構成員である原子核を、日常生活の中で、大量に壊し始めたことであると考えている。原発で生まれてくる核分裂生成物の処理は、世界中の富を積み上げても解決できない。今回の連載では、地球上の生命現象と近代原子論に基づいて、この「新しい戦争」について、より詳しく解説する。